

岩手宮城福島 MIRAI 文学賞・映像賞 受賞者インタビュー③

梅若とろろさん

✓2023 年度文学賞 『かえるところ』

小説執筆に初めての挑戦

―― まずは、ご自身の東北との関わりや応募のきっかけについて教えてください。

梅若とろろさん：私は福島県須賀川市の出身で、大学進学をきっかけに京都に移り住みました。今回の賞については、ウェブで公募を探していた時に見つけて、応募を決めました。

―― もともと執筆活動をされていたのですか？

梅若とろろさん：普段は俳句や短歌が好きで創作活動をしています。今回のペンネームも、大学の授業で出会った、松尾芭蕉の『猿蓑の巻』の一つである『梅若菜丸子の宿のとろろ汁』という句からとっています。

もともと小説には興味があったのですが、大学の卒業を機に、何か大きなものを書いてみたいと思い、この賞への応募を決めました。卒業制作のような形で、自分の節目としてチャレンジしたかったんです。この賞も短編ではありますが俳句や短歌と比べると長い文章なので、大きなチャレンジでした。執筆期間は約二ヶ月かかりました。



・インタビューにこたえていただいている梅若とろろさん

思い出の故郷を舞台に

―― 初めての小説執筆とのことでしたが、まずはどのようなことから考え始めましたか？

梅若とろろさん：自分の育った土地である須賀川を舞台にし、どの部分を書くかを考えまし

た。特に、紹介したい場所がたくさんありすぎて、すべてを詰め込むことができなかったのが大変でした。自分にとっても馴染み深く、それでいて賞のテーマでもある、県外の方にも受け入れてもらいやすそうなところをピックアップしました。



・ウルトラマンのモニュメントが並んでいく通り

—— 作品には登場しなかったけれど、紹介したかった場所がありますか？

梅若とろろさん：はい。個人商店を全部紹介したかったのですが、尺が足りませんでした。小さい頃からお世話になったり、友達の家が経営していたりする商店が多くあります。実家が美容室をやっているので、そのお客さんからも可愛がっていただきました。様々な縁があって、その人達を見てほしいなという思いがありました。

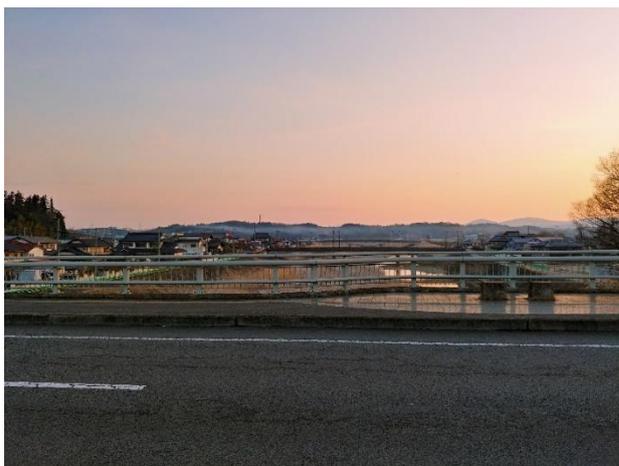
—— 登場する人物たちに実在のモデルはいますか？

梅若とろろさん：はい。例えば、ウルトラマンの生みの親の円谷英二監督の従甥である、喫茶店のマスターがいます。小さいころからお使いで、コーヒー豆を買いに行ったりと親しんでいる方です。

作品のこだわり

—— 作品で特にこだわった部分はどこですか？

梅若とろろさん：読んでくれた人が須賀川に降り立ったら、作品のままの風景が広がるように、再現性を重視しました。小さいころから過ごした商店街の風景を人の温かみと一緒にイメージしてもらえるようにしました。特に、ラストのシーンがこだわりで、このシーンを持つてくるために物語を展開しました。温かい人々、夕焼け、防災無線から聞こえる帰ってきたウルトラマンの曲、まさに私にとってのかえるところなんです。



・冒頭の橋のシーン

賞のテーマである、「訪れてみたくなる」というものに賛同し、これをきっかけに須賀川に来てくれる人が増えたらいいなという思いで書ききりました。

受賞後、故郷の方々からの温かい祝福

—— 受賞の感想を教えてください。

梅若とろろさん：本当にただ書いただけだったのですが、思った以上にいろんな人に喜んでもらえて嬉しかったです。地元の馴染の方々にも知ってもらいましたし、喫茶店のマスターにも報告に行きました。なぜか須賀川市長にも訪問することになったりとなんか事が大きくなっていました（笑）。あとは、手紙で感想をいただいたこともあり、その言葉がとても心温まりました。やってよかったと思える瞬間でした。

この町のためになればいいなという思いもあって執筆したものが、実現してしまった、という喜びが大きかったです。

—— 受賞によってどのような変化がありましたか？

梅若とろろさん：受賞してから、小説やその他の創作活動を続ける意欲が湧きました。これが初めての小説執筆だったので、それが第一歩になりました。『やってみなきゃわからない』という気持ちを持って取り組みました。

―― 初めての作品、手応えはあったのでしょうか？

梅若とろろさん：実はやるからには賞を取りたいと思っていました。過去の受賞作品を研究し、何をテーマにするか、文体のレベルなどを考えました。書きたいものがたくさんあって、伝えたいことがたくさんあればあるほど、独りよがりになってしまいがちなと思ったので客観的に書くことを意識しました。

歴史を大切にしまちの姿が自身の原点に

―― 最後に、須賀川の好きなのところを教えてください。

梅若とろろさん：須賀川市は宿場町でもあり、松尾芭蕉が奥の細道で滞在したおかげで、俳句の教育が盛んです。俳句ポストが町にあり、備えつきの紙と鉛筆があって、その場で俳句を書いて投函できるんです。歴史を大事にし、そういった文化を背景にした教育に力を入れているところが好きだなと思います。私が俳句や小説を好きになったのももちろんその影響です。



・梅若とろろさんにとっての原風景となる景色

——今、地元から離れて気づいた須賀川の良さなどありますか？

朝七時になると防災無線が流れて、朝が始まっていくというのは何か独特な感じがします。都会では、朝も夜もずっと人が動いている。須賀川では、朝日とともに通りに人が多くなってきたり店を開けたり、昼間は人の営みを感じられて、夕方になると徐々に人が帰っていく。まちが寝起きしていて、それがとても心地よく感じます。

本当に素敵なまちなので、物語にも出していたM78 光の町の住民登録をぜひ！（笑）

梅若とろろさんからは溢れんばかりの故郷愛をお聞きできました。

岩手・宮城・福島 MIRAI 文学賞・映像賞は、初めて小説執筆に挑戦するという方も大歓迎です。地域の未来を物語や映像にのせた作品のご応募をお待ちしております。